高市早苗

巻頭鼎談

西本安博

奈良県安堵町 町長

川井徳子

ノブレスグループ代表

総務大臣

奈良県安堵町に地域の経済構造改革の先進事例を訪ねて

今、地方が自ら資金循環を起こし、自身の力で活性化することが求められている。そのため総務省では、集約とネットワークによる地域全体の経済性向上を図る「地域の経済構造改革」に取り組んでいる。先進事例を視察した高市大臣に同行した。

構成●編集部　写真●河野利彦
写真提供●安堵町、うぶすなの郷TOMIMOTO

富本憲吉の居室を客室とした「日新」の縁側で日本庭園を眺める高市大臣（右）、西本町長（左）、川井代表（中）。

Yasuhiro Nishimoto

1947年奈良県安堵町生まれ。立命館大学法学部卒。奈良市役所で交通政策課長、財務部参事、企画部理事、観光経済部長などを歴任。株式会社都祁総合開発代表取締役、安堵町教育員会委員を経て、2010年8月に安堵町長就任。14年8月に再選（2期目）。

Noriko Kawai

1958年奈良市生まれ。立命館大学（西洋史専攻）卒。97年に父親が経営していた運送会社を引き継ぎ、現在は不動産業、観光業、IT・デザインなど6つの会社を束ねるノブレスグループの代表。著書に『不動産は「物語力」で再生する』（東洋経済新報社）。

総務省では、地域の資源と資金を活用して、雇用の吸収力の大きい地域密着型企業を全国各地で立ち上げる「ローカル10,000プロジェクト」を推進している。

奈良県安堵町は同プロジェクトによって、伝統家屋を宿泊施設および地元の食を活かしたレストランの「うぶすなの郷TOMIMOTO」に改装した。さらに、伝統工芸である灯芯を活用した和キャンドルなどの新商品の企画販売を開始した。

この事業は、まさに地域資源を活用した先進的で持続可能な事業であり、他の同様な公共的な地域課題を抱える地方公共団体に対する高い新規性とモデル性が認められたわけである。

今回、「地域力の創造、地方の再生」という地域経済好循環推進プロジェクトを牽引する高市早苗総務大臣と、このプロジェクトの実現に尽力した西本安博安堵町長、川井徳子氏との鼎談が、改装成った同施設で実現した。

数多い採択事業のなかでも特徴的な取り組みの経緯や今後の展望を直接語っていただくことで、取り組みを検討している地域にとって、有益な参考事例となることだろう。

Sanae Takaichi

1961年生まれ。神戸大学経営学部卒。
93年衆議院議員に初当選。現在、7期目（奈良2区）。
2006年、第1次安倍内閣で内閣府特命担当大臣に就任し、初入閣。
自民党政調会長を経て、14年第2次安倍改造内閣で
総務大臣に就任。第3次安倍内閣・第3次安倍改造内閣・
第3次安倍第2次改造内閣でも再任。

安堵町は富本憲吉を始め多くの偉人を輩出

――まず、安堵町を知るために、この町の文化、歴史などについてご紹介していただければと思います。

西本　安堵町は、奈良盆地の北西部に位置する町で、南には大和川が流れる美しい田園風景が広がり、一方、西名阪自動車道沿いには「大和まほろばスマートインターチェンジ」の開発により企業立地が進んでいます。

世界遺産である法隆寺が近くにあり、町内にはかつて聖徳太子（厩戸皇子）が斑鳩宮と飛鳥を行き来したとされる古道「太子道」が通っており、今もその名残を残しています。

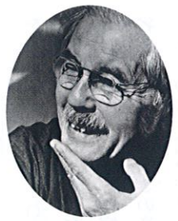
一方、町の南に大和川、西に富雄川、中央を岡崎川が流れ、難波の津と飛鳥を結ぶ水運の要衝として、豊かな歴史・文化が古より集積している地です。

――この地からは、多くの偉大な人物が輩出されたと聞いていますが。

西本　その通りです。中でも特に輝かしい功績を残した人物を出した家として「今村家」があります。幕末、京都で医学と儒学を学び柳生藩や中宮寺の侍医を務め、自宅に「晩翠堂」という塾を開いて多くの人材を輩出した今村文吾は、江戸時代末期に起こった「天誅組の変」に志士として加わった国学者の伴林光平とも深い交流があったことでも知られています。その変では多くの門下生がかかわりました。

次に、明治から大正時代、奈良県が堺県に、次いで大阪府に編入された後、奈良県を独立・再設置に導いた功績によって初代の県議会議長を務めた今村勤三は、文吾の甥にあたります。のち、大隈重信の改進党で衆議院議員として活躍し、政界引退後は、明治時代の産業の発展にも大きく貢献し、奈良鉄道、初瀬鉄道、四国・讃岐鉄道、養徳新聞社、奈良県農工銀行、郡山紡績（合併

> 外部から人を呼び込むだけでなく地域の人が幸せを感じることが大切
> ――高市



富本憲吉（1886―1963）
陶芸家。
色絵磁器に金銀彩を加えた
華麗な作風を大成。人間国宝。

今村荒男（1887―1967）
内科学者。元大阪大学第5代総長。
結核予防と治療に尽力した。
勤三の四男

今村勤三（1851―1924）
明治・大正の実業家・政治家。
奈良県の再設置運動に私財を投じた。
文吾の甥

今村文吾（1808―1864）
幕末の医師・儒学者。
大和国添下郡安堵村の家は、
代々大和中宮寺の侍医を務めた

されぬ後の大日本紡績）など、当時の近代化にかかるさまざまな会社を設立し、実業家としても活躍しました。

そして、明治から昭和にかけて医学者として大成し、活躍したのが、勤三の四男・今村荒男です。大阪帝国大学（現大阪大学）第5代総長で、同校を総合大学に発展させ、結核感染病を専門に研究し、現在の奈良県立医科大学の初代校長や大阪府立成人病センターの初代所長などの要職を歴任しました。「BCG接種」を初めて採用し、レントゲン車による集団検診を考案するなど、わが国の予防医学の基盤を打ちたてた荒男は文化功労者として、日本の近代産業・医学・薬学の発展に大きな功績を残しました。

――今回、お話をうかがう場所になった「うぶすなの郷TOMIMOTO」の元々の主であった陶芸界の巨匠・富本憲吉とは、どのような人物だったのでしょう。

西本　明治から昭和にかけて陶芸家として名を成し、東京美術学校の教授、京都市立美術大学教授を務め、初の人間国宝で、のちに文化勲章を受章、気品にあふれる数々の色絵磁器を作り出しました。

彼は生まれ育ったふるさとを〝うぶすな（産土）〟と呼び、安堵の風景や自然は、彼の作る陶芸作品のモチーフ（図案）として用いられました。そして、先にお話した今村荒男とは旧制郡山中学校でのクラスメイト、一生涯の友人でした。

――富本記念館の誕生と閉館に至った理由、そして、このたびの新たなプロジェクトを起こした経緯をお聞かせください。

西本　富本憲吉と同郷で「富本憲吉記念館」の創設者である辻本勇は、富本に心酔し、1974年（昭和49）に私財を投じて記念館を開設し、同館の運営や富本作品の研究に邁進、陶芸作品はもとより、デザイン類の収集にも力を注ぎました。しかし、創設者の没後、2012年（平成24）に、惜しまれながら閉館となりました。

郷土の誇りである富本憲吉の生涯を何とか新しい形で後世に繋いでいきたいというのが私たちの願いでした。そこで、大和の旧家の文化的価値の高い木造家屋や、かつての環濠住宅であった濠の風景を残しながら、法隆寺、太子道を核とした広域観光の拠点として再生したいという狙いで総務省の「ローカル10,000ロジェクト」に応募することにしました。

地域活性の視点から、地域の資源と資金を活用して地域金融機関と連携した民間活力・ノウハウによる成長戦略が不可欠である今、国・町の補助金を活用しながら、民間の資金とノウハウで「うぶすなの郷TOMIMOTO」に生まれ変わったことは、安堵町にとって大きな飛躍と大変喜んでいます。

安堵町は面積4.31㎢、人口約7,500人。
町の南には大和川が流れ、田園風景が広がる。

そこで生活することの楽しさの醸成が必要

――このたび、高市総務大臣はこのプロジェクトの視察に訪れたわけですが、ご感想をお聞かせください。

高市　一度閉館された富本憲吉記念館を「うぶすなの郷ＴＯＭＩＭＯＴＯ」として再生されるまでには、大変なご苦労があったことと拝察します。総務省としましても、この意義深いプロジェクトのお手伝いができたことを、うれしく誇らしく思います。

私は、富本憲吉氏が故郷・安堵を「うぶすな」と呼んでおられたことを、この再生プロジェクトのキーコンセプトに据えられたということに注目しました。郷土の土を材料にさまざまな陶磁器を創作していくという作業は、まさに当時のイノベーションだったのでしょう。今度は、その富本憲吉氏の魂が、「うぶすなの郷ＴＯＭＩＭＯＴＯ」を舞台として、多くの皆さまの中に、陶磁器を「観る喜び」、「使う喜び」、そして自分で「創る喜び」を生み出していくのではないかと期待します。それは、安堵町で生活することの楽しさにつながると思うのです。

私は、地域活性化や地方創生のためのプロジェクトは、地域資源や歴史・文化などを活かして外部から人を呼び込むことだけではなく、住民の皆さまに「この地域で生活することが、楽しくて幸せだ」と思っていただけることが大切だと考えています。

――川井さんはこのプロジェクトを実質運営されているわけですが、これまでのご苦労なども含めて、今後の抱負をお願いします。

川井　安堵町は人口も少なく財政規模も小さいので、観光協会などもありません。これまでの所有者の方は長らく続いた不況のせいで経営的に苦労されたと聞いています。残念なことに、私たちが気づいた時には、この家に富本作品はほとんど残されていませんでした。がらんどうの記念館は寒々としており、ひと気がなくなると、あっという間に雑草が生い茂り、かなりひどい状態になっていました。富本らしいものとして残っていたのは「樹を楽しむ陶器を見るに似たり」という言葉とふすま絵だけでした。しかし、町には富本の才能を育んだ「風土」と息づかいが残されていました。

私たちはここで、富本憲吉の美術工芸の哲学と才能を育んだ自然を五感で感じとり、時を超えて流れる大和川の文化に触れていただきたいと考えています。結果として「安堵町と奈良県の中和地域の観光拠点」となることを目指しています。

富本憲吉の筆によるふすま絵を用いた違棚の天袋前に。

地域経済・文化のエンジンとなる拠点を期待

――それでは、邸内をご案内いただけますか。

川井　門屋を抜けてこの客室に続く日本庭園は、富本憲吉の生家らしさを感じてほしいと力を入れました。庭園内の樹木や草花を眺めながら、自然を作陶に重ね合わせ、植物をモチーフにデザインを展開した富本の想いを体感していただきたいと考えたからです。

客室は「日新」と「竹林月夜」の2棟をご用意いたしました。「日新」は富本が書斎として使っていた和室をそのまま残しています。富本の親友で、結核の世界的な権威である今村荒男とともに日本を新しくするというテーマで書画を安堵町に残しています。そのモチーフを客室の名前にしました。

ふすま絵のエビヅルのデッサンをモチーフに、当施設のシンボルマークを作りました。富本を象徴するデザインは他にも多くありますが、私ども「うぶすなの郷ＴＯＭＩＭＯＴＯ」は、富本の日常を代表する優しい息づかいがこのエビヅルのデッサンに込められていると思い、採用しました。

もう一方の客室であるこちらの部屋は「竹林月夜」をテーマにしています。リビングから竹の葉が風に揺れる音や、夜には月明かりに照らされた幻想的な景色を楽しむことができます。

この町には伝統的日本家屋だけでなく、中世から続く武家屋敷の堀、「社」を中心とした細い路地といった独特の昔の町並みがそのまま残されています。さらにその景色を、富本が作品に描いており、この地域一帯が富本のテーマパークとなっているといえるでしょう。日本の方はもちろんのこと、海外の方々にもふるさとに帰ったような感覚を体験していただけるのではないかと思います。

われわれが目指すおもてなしは、日本的な懐かしさと富本の芸術性、富本の精神と陶芸の文化を肌で感じていただけることです。そのために、これからも工夫していきたいと思います。さらには文明発祥の地・大和川や聖徳太子のゆかりの地、斑鳩の歴史・文化を楽しみながら緑豊かな自然の中でゆったりと流れる贅沢な時間を愉しんでいただければと……。

奈良、安堵・斑鳩、飛鳥を繋ぐ周遊エリアの拠点としていきたい
――西本

――ご覧になって、大臣はどのようなご感想をお持ちですか。

高市　川井さんの深い知識と細部にわたるこだわりのおかげで、本当に素敵な拠点として生まれ変わりましたね。

第一に、西本町長や川井さんをはじめとするご関係の皆様の努力によって、「第一級の日本文化の拠点」として、世界にアピールできる場所をつくっていただいたことに、感謝しています。安堵町には、聖徳太子ゆかりの地としての歴史、そして富本憲吉氏をはじめとする文化活動の積み重ねはありましたが、世界に訴求していくためには、「百聞は一見に如かず。とにかく一度、ここにお越しください。そうすればわかっていただけます」と言える場所が必要でした。

この「うぶすなの郷ＴＯＭＩＭＯＴＯ」を核として、安堵町の街並み全体が再構成されただけではなく、奈良市内から安堵・斑鳩エリア、そして飛鳥を繋ぐ大きなまとまりを、わかりやすく表現できるようになったと思います。それぞれの地域の魅力が補完し合って一つの大きな周遊エリアとなりますから、国内外にアピールできますね。

第二に、「地域の経済・文化のエンジンとなる拠点」としても、期待しています。先ほど申し上げましたように、芸術・文化を通じて安堵町で生活をすることの楽しさを感じることもできますし、お洒落なレストランで地元食材を活用したさまざまな料理を提供していただければ、安堵町の農業振興にもつながります。和キャンドルの販売で町の伝統工芸品である灯芯も活かされ、産業の見本市のような役割も果たしていただけますね。

――大臣からの期待に応える立場である町長に、これからの構想も含め、将来の夢をお聞きしたいのですが。

西本　実は、すでに安堵町の皆さんが地域の暮らしを楽しんでいただける場所になってきています。

この春には、町の一大イベントであります「夜桜まつり」に合わせて、イベント会場での特別出展に加え、「うぶすなの郷ＴＯＭＩＭＯＴＯ」が特別公開され、見事に咲き誇った「憲吉桜」が見物客を出迎え、大変好評でした。

昨年、夏の「祈りのつどい」でも、会場周辺と一帯になって「うぶすなの郷ＴＯＭＩＭＯＴＯ」の庭園がライトアップされ特別公開されました。

秋の収穫祭として開催される「芋煮会」や「産業フェスティバル」にも参加いただくことにより、地域の方々との交流が深まり、地元の催しが非常に盛り上がりを見せています。

これまで、文化的価値の高いところで、親戚、家族の晴れの日などで利用するところがあればいいのにとのお声をたくさんいただいておりましたので、オープン以来、皆さん、少しおしゃれして来られるようで、本当に喜んで来ていただいております。また、遠くからも毎日お客様が来られますので、改めて地元に「うぶすなの郷ＴＯＭＩＭＯＴＯ」がオープンしたことを、喜んでおられます。

実は、私どもの安堵町歴史民俗資料館は、先ほどからお話をさせていただ

きました、「今村家」の屋敷がご親族から町に寄贈されましたので、資料館とし、安堵町の歴史・文化の情報発信拠点としています。庭園には八重のシダレザクラ「勤三桜」が咲き、期間中毎年一般公開をしております。「うぶすなの郷TOMIMOTO」の庭園のシダレザクラもまた、みごとですので、「憲吉桜」と命名し、双方が連携しながら共通の催しができればと考えています。

富本憲吉をコンセプトに掲げた理由とは？

——ところで、この施設の〝売り〟の一つは「食」であると聞いています。今後、多くのお客様に来ていただくためには、さまざまな取り組みが必要になると思いますが。

川井　こちらでは、地元の旬の野菜を使ってお料理を提供しています。残念なことに、この近辺の農家さんは自宅で消費する分だけを作られているところがほとんどなのです。最近、近くの神社の宮司様から、農家の方との共同事業の申し出がありました。料理長も毎朝、その日に使う食材を地元の市場で選んでいて、まさに旬を仕入れてきています。

今後は、地域の生産者グループと連携し地元の農産物を安定的に仕入れられるようにしていきたい、もっと地産地消を推進していきたいと考えています。そうすることで、地域の経済循環にも貢献させていただけるように頑張ります。

> 地域の経済循環に
> 貢献し、末永く喜ばれる
> 施設を目指します
> ——川井

オープン以来、ランチには奈良や大阪を中心に大勢のお客様にお越しいただいています。地元からは法事での利用や七五三のお祝いなど冠婚葬祭に利用したいとお声を掛けていただいています。そういった地元の皆さんのご要望にもお応えできるように、さまざまなプラン開発を進めています。

ゴールデンウィークには、てびねりと絵付けの陶芸体験を開催し、地元の方々にもご参加いただきました。今後は私どもが奈良市内で運営するホテルなどとも連携して、安堵町と周辺を散策し、歴史の世界に想いを馳せるプランも企画しています。

先ほど高市大臣が「奈良市内から安堵・斑鳩エリア、そして飛鳥を繋ぐ大きなまとまりがわかりやすく表現できるようになった」とおっしゃっていただきました。今後、奈良県の奈良県国際芸術家村構想ともコラボレーションし、奈良市内から安堵・斑鳩エリアそして飛鳥を繋いだ周遊エリアの一つの拠点としてアピールしていきたいと思います。

最近は、地元安堵町のイベントにも参加させていただいております。田舎は閉鎖的とよく言われますが、ここは全く違います。地域の皆さんに本当に温かく迎えていただいております。この皆さんの「温かさ」こそ富本憲吉を育み、彼がことあるごとにここに戻ってきた理由かなと感じております。地域の皆さまに末永く喜んでいただける施設でありたいと思っています。

——富本憲吉については、海外でも評価が高いようですね。

川井　先日、アレン・グリーンバーグ駐大阪・神戸米国総領事が奥様とドイツのご友人とともにお見えになりました。富本の作品はグローバルに評価されていることを改めて実感いたしました。今回お迎えしたグリーンバーグ総領事をはじめ、海外の方に芸術を通してアピールできる力があると信じています。

富本を民芸の作陶家と言われる方がおられますが、全く違うと思います。浜田庄司、河井寛二郎とも交流はあったようですが、富本は若い頃に英国だけでなく中近東・インドにも調査に出かけており、世界のデザインや美学の研究を行っています。

工業化が進んだ大量生産時代に誰よりも早く、手作りの良さ、生活を豊かにする美術や工芸の大切さに気づいていた「日本のデザイナーの先駆け」でした。その考え方は、まさに今求められているものです。百年先の未来を見つめて生きてこられたような人です。だからこそ、世界でも評価されるのだと思います。

欧米では芸術はロジックが必要です。富本は欧米の芸術表現活動を踏まえて創作を行っていました。

リーダーの揺るぎない価値観が地域づくりの要に

——この町は聖徳太子ゆかりの地ですが、高市大臣は政治家として太子に対してどのような思いをお持ちですか。

高市　聖徳太子は、秩序正しく円満な国づくりのために、当時の公務員が遵守すべき行為規範を「十七条憲法」という最古の成文憲法として制定された偉大な方です。

その第一条は、「和を以って貴しとなせ」で有名ですが、「協調の気持ちで論議するなら、おのずから物事は道理に適い、どんなことも成就する」ということが記されており、第四条には、「礼法が保たれている時は、社会の秩序も乱れず、国全体として自然に治まるものだ」ということが記されています。

本日は、この美しい場所で、西本町長と川井さんのお話を伺い、聖徳太子が築かれた「和」と「礼」を重んじる王道のモデルと言えるのではないかと感じました。プロジェクトをリードする方々が大切に守り伝えたい価値観が揺るぎないものであることによって、素晴らしい地域づくりができるのだと確信しました。

——川井さんも聖徳太子に対する熱い思いをお持ちだとか。

川井　高市大臣のお言葉どおり、この地は聖徳太子への信仰とともにありました。その信仰によって、太子のように社会に役立つことを人生の志とした「歴史を動かす人物」を作り出したのだと思います。

オリンピックの翌年、2021年は聖徳太子没後1400年にあたり、奈良県も聖徳太子プロジェクトを予定しています。

このたびのオリンピックの会場・新国立競技場の設計は法隆寺がモチーフと聞いております。聖徳太子は大工さんたちの神様でもありました。いわば日本建築の神様が、ギリシャ神話に基づくスポーツの祭典をお招きになるということです。

オリンピックの祭典を通じて、日本の伝統的木造建築物の美しさやそれを守り抜いてきた技能のすばらしさが世界に伝わっていくことでしょう。それは、高市大臣がお示しになった聖徳太子の美徳を世界にお伝えすることでもあります。この銀河のようにきらめく人と人が織り成す綾織物のような美しい物語を世界中の人々にご紹介することを通じて、ここまでご支援いただいた安堵町へ少しでもご恩返しができればと願っております。

4月に行われた「あんど桜まつり」で特別公開された「憲吉桜」。

蔵をリノベーションした客室「竹林月夜」で。